

〔一〕 次の一線のカタカナを漢字になおしなさい。

- 1 ソツギヨウシキまであとわずかだ。
- 2 コウキユウなレストランに行く。
- 3 ユウエキな書物を取りよせる。
- 4 みんなの前で意見をノべる。
- 5 ユウキを出して立ち向かう。
- 6 新しい土地にイテンする。
- 7 人命をキユウジョする。
- 8 ジュンジョよく並ぶ。
- 9 機械をソウサする。
- 10 イフクを着がえる。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

森さんの家は、小倉山のふもとにあります。森さんが、この村で暮らそうと考え始めたのは、まだ第二次世界大戦が終わっていないころでした。そのころの村には、常寂光寺と落柿舎という庵をふくめて、十六軒しかありませんでした。戦後、この村の若い人たちは、不便なこの村を見捨てるように、都会を目指して出て行って、年寄りだけがのこりました。森さんは、この村に、小さな家をたてました。見捨てられていく村で、未来をみすえて暮らそうと考えたからです。不便をあえてえらんだことになりす。

現在、森さんの家の入り口には、「アイトワ」と書かれた素朴な看板がかかげられています。アイトワというのは、「愛よ永久に」という意味をこめてつけた名前だそうです。

「あのね、ぼく、手ぬぎの名人なんよ。あの畑、トウモロコシ作って、コマツナ作って、サツマイモ作って、それで、こやしは一度だけ。そのこやしも、自分たちのウンコやオシッコを、腐らせて使うんやで。ぼく、ケチとちがいますよ。これ、木イチゴ。これ、すもも。それに、ほら、そのあたり、いっぱい花が咲いてるやろ。みな、実をつける。」

戦後すぐこの土地を開墾して、いよいよ家が建てられるようになったとき、森さんは木を植えました。栗の木五本、柿の木五本。十本の実のなる木です。

(1) ところが、今、二百種千本の木が育っています。森さんが植えた木もありませんが、ヤツデやアオキなど、小鳥がふやした木もあります。「実がなると、鳥が食べにくるやろ。ついでに、葉っぱについてる虫をみつけて、ちよんと食べるのね。農薬なんかまかんでいいわけ。うちの庭には、くもがいる。カエルもモグラもいる。トカゲもな。アブラムシはテントウムシが食べる。ミミズは腐葉土を食べて、ウンコする。それが、ふかふかのいい土を作るんや。いろいろいるから、食べたり食べられたりするのね。命がつながるわけよ。ぼく、いろんなものの性質をよく知って、それを生かしたるんや。それって、手ぬぎの免許やで。この庭、手ぬぎの免許を生かして、ぐるぐるの周りの庭にして、五十年近く作つとるやろ。手ぬぎ免許皆伝やわ。」

森さんが、にやつと笑いました。「ぐるぐるまわりの庭？」
「このごろは、はやりの言葉では、循環型の庭というのかな。」
「循環型？」
「さいきん、やたらと、循環、循環言うとるなあ。」

森さんは、ちよつと照れたように、顔をゆがめました。(3) 森さんは、当
時の「はやり」に背を向けて、そこから一番おくれた暮らしを選びとり、
マイペースで生活してきたのです。

「ぼくね、十九才のとき、忘れられない言葉を聞いているんや。あの夜も、
ぼくは受験勉強していたんやけど、つかれて散歩に出て、いつも行く

野良小屋をたずねたんや。そこには源ちゃんがおった。野良小屋は、農具なんかしまっておく小屋やけど、ぼくがいつも行く小屋は、二、三人なら泊まれるくらい大きい小屋やつた。実りのときがきて、イノシシが、イモやコメを食いあらしくるようになると、当番を決めて、代わりお
おて小屋につめとつたんや。イノシシをおいはらう当番やな。

その夜は、人類がはじめて、人工衛星のうちあげに成功したんで、ぼく、人工衛星スプートニクについて、知っていることをみな、源ちゃんに話してあげたんや。源ちゃんは小屋を出て、空を見あげたんや。ぼくも、源ちゃんとならんで、空を見あげた。源ちゃんが言ったんや。

「そうやって、石油をぼんぼんぬいていたら、湯たんぽといっしょで、いつか地球はからっぽになるな」
源ちゃんは牛の力を借りて農作業していだんやけど、ぼくが話す口ケットの噴射の話に、直感で感じとつたモノがあつたんやろね。ぼくは、どきんとした。

「石油をぼんぼんぬいていたら、いつか地球はからっぽになるな」
源ちゃんの言葉が、耳のおくでこだましていたよ。ぼくは、目をこすつたわ。発見やつた。おおげさでなく発見やつたで。源ちゃんの言ったことの意味に、そのとき、気がついたんや。ぼくの頭は、じーんとしびれとつたわ。しびれる頭で考えたで。源ちゃんの言うとおり、使ってしまったえはなくなる化石資源で、幸せな未来を描けるやろかって。」

森さんは、静かに目をつむりました。森さんの心の奥で、今もものさし

になつてゐる出来事を、思い出しているのです。

「太陽の光と熱、あれは、地球の生き物を生かす力や。太陽の恵みの中で、ものを作り、生きていく。化石燃料にたよらない暮らしを考えて、太陽にたよる暮らしをすることができたら、日本の未来も、地球の将来も、希望が持てるのではないかな。」

二〇一一年、三月十一日十四時四十六分ごろ、三陸沖を震源に、我が国の観測史上最大のマグニチュード九・〇の地震が発生しました。千年に一度と言われる大地震でした。

津波が防波堤を乗り越えて、襲つてきました。船が、自動車が、家が、押し流されていきました。人が、生き物が、道路が、田畑が、濁流に呑み込まれました。

二万人にもおよぶ人が亡くなつたり、行方不明になりました。

愛する家族や生活を奪われた人々を思つて、被害を受けなかつた者もみな、心を乱しました。今も、その方々のことを思うと、どうしたらいいのかと、思い悩みます。

そんな中で、東京電力福島第一原子力発電所の事故は起こりました。

今は六月、事故から三カ月が経つています。後から後から、不測の出来事に見まわれ、まだ収束の見通しもたつていません。

困難な状況の中、放射能計測器を身につけて作業にあたる方々の健康が気になります。

いる家族を思つています。盲学校の先生が、自分の家の空いた部屋を、その人たちに提供したのです。先生は言います。「ぼくの夕飯は、豪華になりました。」先生は独身です。缶詰の夕飯が多かつたそうです。それが今、五人で食卓を囲んでいるそうです。先生の話をきいていると、「しあわせそう」と、わたしまで嬉しくなつてきます。わたしたちは、しあわせつて何かを問い直さねばならないでしょう。

こんな事実を並べて考えてみると、森作りの森さんが言ったことを、みんなで考え合うことは、「これから」を思い描くために、よいモデルになるのではないかと、と思い始めました。

森さんは、太陽の恵みの範囲で生きる暮らしを始めてみよう、と呼びかけていました。

森さんの暮らしは、貧しくありません。いや、都会の人がうらやまされるような、豊かさがありません。手垢のついた言葉をはみだす新鮮な暮らしです。森さんのたいせつにする「しあわせ」は、人と人がその存在を必要としあう暮らしです。それぞれが役目を担う家族を、大切にしています。

わたしは、原発事故が起きる前から、自然エネルギーに関心を持っていました。でも、三月十一日を経験した今、あれはポーズだったのではないかと、反省しています。わたしは、いま、自然エネルギーの可能性をきちんと学びたいと願うようになりました。

わたしたちは、暮らし方を見直さなければならぬでしょう。この

避難指示が出て、原発から二〇キロメートル圏内には、人が住めなくなりしました。町民も役場の機能もすべて町の外へ避難せざるを得なくなった町があります。幼い子どもへの健康被害を恐れて、自主的に故郷を出た人たちがいます。仕事を失つた人たちもいます。福島県産という風評被害も発生しました。人間ばかりが、被害を受けたわけではありません。酪農家が飼育していた生き物たち、自然界のものを言わない動植物も、被害を受けていることを忘れてはならないでしょう。

原子力発電で作られる電気は、安いと言われてきました。A、これらの人々への補償の額を考えると、安い電気ではありません。それにより、この事故で人生が狂つてしまった人たちがいるのです。安い電気は、この人たちの犠牲の上に成り立っていた価格でした。こんなことが起きるなんて……、こんな過酷な現状を引き受けさせられるなんて……、この人たちもわたしたちも、知りませんでした。「原発は安全だ」と言われて、原発のマイナス面を学んでこなかつたのです。わたしたちの便利で快適な暮らしは、胸の痛みを味わわせ続ける問題の基礎の上に築いた城のようなものでした。

その上、原発は、放射性廃棄物を出します。プルトニウム二三九は、放射能を出さなくなるまでに二万四千年かかると言われます。子どもたちの時代、その子どもたちの時代にも、原発から出たゴミは残っているのです。そして、そのゴミは、どう処理して良いか分からない廃棄物です。

わたしは、今、福島県を出て、新しい地(滋賀県)で生きようとして

事故が収束し復興が行われるとき、事故の前と同じような価値観や暮らしを取り戻すのではなく、新しい価値観へ、人間の、多くの生き物の命が大切にされる暮らしへ、方向転換しなければなりません。

わたしたちは、自然に負担をかけ、激しい痛みを加えて、自然破壊を進めてきました。バランスを保っていた自然は、今や病んでいます。

自己規制する能力を、わたしたちは育てることができるとは、わたしたちの欲望を、コントロールできるのでしょうか。

B、わたしたちが、地球と共に生きながらえることを望むなら、自然がもつ自然の治癒力が働くところで、人間の発揮する力を抑制しなければなりません。それが難問です。

この作品をまとめているとき、京都には「始末する文化」があると、教えられました。始末するというのは、
だそうです。着物で考えてみると、縫い直して何度もきた着物は、布団の側になります。それでも傷んだら、よいとこどりをして座布団になります。それが傷んだら、雑巾にするのだそうです。もう一つ、大きく使つて、小さくしもう文化があるとも教えられました。C、ふるしきです。ていねいに使い続けるために、不用のときしまっておきやすい形を、大切にしているようでした。

京都の町衆は、明治という新しい時代が始まる時、身銭を切つて子どもたちのために学校を作りました。新しい社会に希望を持って、子どもたちのために、子どもたちが生きる未来の社会のために、痛みを感じ

でも決断し実行したのです。

福島第一原発事故を経験したわたしたちは、今、⁽⁹⁾これからの暮らしを考え直そうとしています。この思いが長続きして、これからの暮らしが見通せますように。

(今関 信子 『永遠に捨てない服が着たい』)

問一

——線(a)「あえて」・(b)「避難せざるを得なくなった」・(c)「手垢のついた」の意味として最も適当なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- (a) 「あえて」
- ア しかたなく
- イ わざわざ
- ウ 知らずに
- エ さけて
- オ 好んで

(b) 「避難せざるを得なくなった」

- ア 避難しないわけにはいかなかった
- イ 避難することをあせるようになった
- ウ 避難することさえできなくなった
- エ 避難しないでもよくなった
- オ 避難しただがらなくなった

(c) 「手垢のついた言葉」

- ア まねをしたくなるような言葉
- イ じっくり考えて使った言葉
- ウ 乱暴な感じを与える言葉
- エ 使い古された言葉
- オ 深みのある言葉

問二

——線(1)「それが」とありますが、これと同じ意味で使われているものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 今年こそ早寝早起きをすることを宣言した。それがたったの三日で挫折した。
- イ 雨が降るおそれがある。洗たく物をしまつてから出かけることにしよう。
- ウ 今週中に提出する書類が完成したかですって？ それはまだなんです。
- エ 今日の宿題はもう終わったの？ それが済んだらおやつをあげますよ。
- オ いろんなことがあっても最後まであきらめないこと、それが大事です。

問二

問三

——線(2)「ぐるぐる周りの庭」とありますが、それはどのような庭ですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア トウモロコシの次にはコマツナ、サツマイモ、というように次々と作物を作っていくことのできる庭。

- イ 他の生き物たちと関わり合いながら生きている、動物たちの力をうまく利用して、植物を育てる庭。
- ウ 多くの生き物たちとふれあうことができ、子どもたちがのびのびと遊ぶことができる庭。
- エ 都会を目標して出て行った若い人たちが、魅力を感じてもどつてくるような庭。

オ どの季節においても作物がとれ、生き物たちの活動する姿が見られるような庭。

問四

——線(3)「森さんは……マイペースで生活してきたのです」とありますが、それはどうしてですか。「くから」につながるように、本文中から十五文字でさがして、初めと終わりの三文字を答えなさい。

問五

——線(4)「地球はからっぽになる」とありますが、それはどのようなことですか。簡単に説明しなさい。

問六

- 線(5)「ものさし」とありますが、それはどのようなことですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。
- ア 便利で快適な生活をするために、何が必要かを鋭い感覚で見極められるかどうかということ。
- イ 人間の力を超えた大きな力が働いて、よりよい生活へと導いてくれるかどうかということ。
- ウ 目先の便利さにとらわれず、長い目で見たときに地球のためになるかどうかということ。
- エ 化石燃料に変わる新しいエネルギーを地球の中から見つけ出せるかどうかということ。
- オ 地球の中だけではなく宇宙でも暮らすことができるようになるかどうかということ。

問七

- 本文中の A C にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二回使ってははいけません。
- ア たとえば イ あるいは ウ なぜなら
- エ つまり オ もし カ でも

問八

- 線(6)「胸の痛みを味わわせ続ける問題の基礎の上に築いた城のようなもの」とありますが、それはどのようなことですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。
- ア どのように廃棄物の処理をしたらよいかはつきりとわからず人々を不安な気持ちにさせたまま、便利だからという理由だけで放射性物質にたよっていたものかどうかということ。
- イ 人々の生活を一変させてしまうような状態になってはじめて、それまで指摘されていた短所に向き合っていかなかったことに気づいたことから生まれたものかどうかということ。
- ウ 安さや便利さを追い求めてきた人々が、事故によってさまざまな苦しみを味わったことがきっかけとなり、真剣に地球の将来を考えて作り上げたものかどうかということ。
- エ 原子力発電所の事故という思いもよらない出来事によって多くの被害が出たが、それを乗り越えながら新しい生活を始めるようにする人々の希望だということ。
- オ 長い間にわたって人々を苦しめ続けるような危険性にきちんと目を向けず、都合のよい部分にだけ注目して手にしたものかどうかということ。

問九

——線(7)「しあわせって何か」とありますが、「森さん」は何を「しあわせ」と考えていますか。本文中から二十文字以内でぬき出して、初めと終わりの三文字を答えなさい。

問十

——線(8)「新しい価値観」とありますが、それはどのようなことですか。次の文の にあてはまる言葉を本文中からぬき出して、Xは二文字、Yは八文字、Zは四文字で答えなさい。

私たちが自己の欲望を X する能力を身につけ、人間や Y を大切にし、自然の Z を崩さないように心がけること。

問十一

本文中の にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア 古くなったモノはおしいと思わずに捨てる事

イ 必要なモノ以外を整理してしまっておく事

ウ 不要なモノは整理してしまっておく事

エ 一つのモノを最後まで生かし切る事

オ いらぬモノはどんどん処分する事

問十二

——線(9)「これからの暮らしを考え直そうとしています」とありますが、筆者はこれからの暮らしがどうなるかと良いと考えていますか。わかりやすく説明しなさい。

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

健がまだ幼かったころ、家族で海釣りに行き、船の上からスノーカーで水をくんで遊んでいた。しかし、誤って海に落ちてしまい、助けようとした父は足をけがしてしまった。

いよいよ運動会まであと一週間、という日曜日のことだった。

「夕ご飯ですよ。」

食堂からかあさんの声がひびいた。

健が階段を下りていくと、とうさんはビールのコップをかたむけている。顔色をただただ、すでにいいごきげんなのがわかった。

「ひろみー。みんな、待ってるのよ。」

もう一度、かあさんが二階に向かって声をかけた。

ようやく階段を下りてくる裕美の足音は、やけに静かだった。裕美はテーブルの横へ来ても、席につこうとしない。みようにとがった感じのする青白い顔を見上げて、健はいやな予感がした。

「ほら、すわって、すわって。」

かあさんはご飯をよそいながら、裕美をうながすようにしゃもじをふった。

「あたし、おなか、すいてないんだよね。つていうか、さー。」

裕美は、ぶつきらぼうに切りだした。

さんだつて、ふつうに見物してりやいいじゃん。わざわざみつともないこと、することないよ。」

とうさんの背後で、かあさんが口だけばくさせながら、裕美に向けてしゃもじを二度三度ふっている。くちびるの形で、「やめときなさいよ」と、という意味にとれた。

でも、それが、かえって(3)に(3)をそそぐ結果になった。

「だいたい、ずるいよ。おかあさんだつて、健だつて、みんな迷惑してるのに。ほんとのこといって、わたしだけ、悪い子になるっ！」

裕美がいい終わるか終わらないうちに、山河家の食堂はバトルロイヤルのリングと化した。

「ちよ、ちよつと待つてよ、裕美。わたしはそんなこと、思つてませんよ。かんちがいしないでちょうだい。去年のおんぶりレーみたいな、ああいうのはもうこりごりだつていっただけよ。」

「ぼくだつて、迷惑だなんていってないよ。ぜったいにいってないよ。だつて、ぼくは保護者競技、大好きだもん。とうさんはクラスでも人気者だし、だいいちおもしろいじゃん。文句いうのは、ねえちゃんだけだ。いつだつて、そうだもんね。おお、いやだ、いやだ……。そればつか。」

「いつてなくても、みえみえだよ。健はだいいち、おとうさんに文句つけられる立場じゃないもんね。」

「どういう意味だよ。いつてみるよ。」

「いわれなきや、わかんないわけ。」

「おとうさん、今年も保護者競技、出るつもり？」

とうさんは不意をつかれて、むぐつ、とのどをならした。かあさんはしゃもじをにぎつたまま、まねきねこのように動かなくなった。

裕美はつとめて無表情をよそおつたまま、とうさんを見おろしている。

「もしそうだったら、わたし、今年の運動会はさぼるから。じゃ、そういうことで、よろしく。」

ドン、ドン、ドン！

こんどはわざと大きな足音をたてて、階段を上りだした。

「ちよつ、ちよつと待ちなさい。」

そこでようやく、とうさんがよびとめた。

「どうして、とうさんが保護者競技に出たらいけないんだ？」

裕美は階段の四段目でうつむいて、しばらくだまつてつっ立っていた。それから、くるりとふりかえると、乱暴にいいはなった。

「理由なんて、わかっているじゃん。はずかしいよ。迷惑だよ。」

生意気でえらぶつた裕美だけど、とうさんに正面きつてこんな態度をとるのははじめてだ。

ビールのよいもさめてしまったらしい声で、とうさんがいった。

「それは、どういう意味なんだ？ まず、こつちに来て、ちゃんとすわりなさい。」

A 階段を下りてきた裕美は、いすにはすわらなかった。

「保護者競技なんて、うざい！ 出ない親のほうが多いじゃん。おとう

「わかんねーよ。いえつたら。」

「だいたい健なんか、無責任で、ノーテンキで、さいつてーだよ。」

「そつちこそ、さいつてーのくせに。」

「いいかげんにしろ！ やめなさい！ ひとつだけ、はつきりさせたほうがいいな。おまえたちは、とうさんのやるのがはずかしいのか。

それとも、とうさん自身がはずかしいのか——つまり足のことだろう。どつちなんだ？」

健の心臓がちぢみあがつた。裕美はだまりこみ、かあさんはため息をつきながら頭を左右にふった。

「はずかしいなんて、ぼくはひとこともいってないもん。思つたこともないもん。」

けど、けんめいにしぼりだした声は、みようにかすれていた。みんなはなんにもきこえなかったように、健のことを完全に無視した。

「とうさんは子どもころから、友だちを笑わせるのが好きだった。足のことなんて関係ない。みんなで楽しくやるのが好きなんだ。だいいち、そんなにいうほど、とうさんの足は悪いわけじゃない。」

「だからって、わざわざみつともないこと、しないで！」

とうさんは、ひとときわ静かにたずねた。

「足がふつうだったら、笑いをとつてもいいってことか？」

裕美は、すどん、といすにすわりこんだ。

「そういうわけじゃ……。ない……。けど……。」

消えいりそうな声は、最後は泣き声に変わった。

「あなた、そこまでいわなくても……。」

かあさんは B している。

とうさんはむつりして、答えない。とうさんもちよつと意地になっているのだ。いどむような顔つきで、裕美をにらんでいた。

健はすっかり混乱していた。とうさんと裕美のやりとりをきいているうちに、頭の中で、なにもかもがごちゃごちゃになった。

家族全員を巻きこむ騒動も、もとはといえば健が原因だ。

(でも、わざわざ問題を大きくするねえちゃんは、ぜったいに許せない。)

めそめそ泣きだした裕美は、強がって反抗的にふるまっていたときより、かえって健をいらいらさせた。

(4) その姿を見ているうちに、日ごろのうつぶんが一気に爆発した。

「ねえちゃんは、ずるいよ。自分が関係ないから、そうやって文句ばっか、いうんだ。人のことばっか、責めるんだ。いつだってそうじゃないか。チョーいじわるだよ。とうさんの気持ちになってみるよ。ぼくの気持ちになってみるよ。」

いいだしたら最後、止まらなくなった。

「ねえちゃんは、かつこよくとんだり走ったり、じまんできるようなとうさんがほしいんだ。それなら、運動会だって、保護者競技だって大好きで、うれしくつてしようがない。大いばりだよ。なのに、とうさんは……それができないから、とうさんにあたるんだ。でもって、とうさ

さぼるつもりかな？」

土曜日になって、かあさんはとつぜん、夕食の席でせかせかと宣言した。

(5) 「悪いけど、あしたは運動会、行けなくなったからね。」

健の心臓が音をたててちぢんだ。裕美は固まったまま、息の音ひとつたてない。

「駒井さんのチャリティー・コンサートなの。秋のコンサートは、いつも運動会と重なるから失礼してたけど、今回はそうもいかないの。ご主人が急に入院されて、手が足りないんですって。舞台裏は力仕事もあるから、おとうさんといっしょにお手伝いにかがうことにしました。ね、あなた？」

とうさんは、「んん？ うん」と、うなっただけだった。

いよいよ運動会の当日になった。

とうさんが来なければほととずる……はずだった。ところが、ほんとうに来ないとなったら、健自身、ものたりなかった。不満だった。

午後の部のオートプニングをかざる保護者競技は、明らかに盛り上がり欠けていた。

六年生の席には、裕美がなに食わぬ顔をしてすわっている……ように見えた。

(ぼくのことなんか、わざと無視しているんだ。へっ、ねえちゃんは満足だろうよ。)

わけのわからない、むしろくしゃ感が健の胸にひるがっていった。

んの足が悪いのはぼくのせいだから、ぼくをうらんで。永久にうらんでる。あんたのせいだからねって、ずつとずつといいつづけてる！」

とうさんとかあさんはあつけにとられ、目を大きく見ひらいて健を見つめていた。

裕美は金切り声をあげた。

「いつそんなこと、いった？ いついったのよ？」

「いつたじゃん。ちゃんと覚えてるもん。とうさんの足が動かなくなるくらいなら、ぼくなんかおぼれて死んじやえはよかった、そう思ってる！」

いい終わったとたん、健は自分で自分のことばにうちのめされていた。首がぶるぶるふるえていた。

裕美はいいかえすことばもなく、赤ん坊みたいに手ばなしで泣いている。

「あきれたな……。おまえたち、そんなこと考えていたのか。」

「そうだよ」と、健はすすりあげた。

「ちがうったら」と、裕美もすすりあげた。

「ちよつと、あなたたちつたら。はあ……。」

かあさんはへなへなと床にしゃがみこんだ。あいかわらず、しゃもじをにぎったままだった。

いよいよ運動会まで秒読みになると、健はすっかり落ち着きを失った。

(とうさんはどうする気だろう？ ねえちゃんは、ほんとうに運動会を

それが爆発したのは、五年生こーれいの借り物競走のときだった。

「よい、ドン！」で走って行って、段ボール箱の中から札をひく。指示されている物を探してゴールまで持っていく、おなじみの競技だ。ゴールと同時に、係の先生がさしだすマイクに向かって、札に書かれていたお題と借りてきた物を発表することになっている。

健は出番を待っていらいと足ぶみしながら、簡単な札に当たるといいなと、そればかり願っていた。

とうとう、健の番がきた。どきどきしながら走って行って箱の中からつまみだした札は、「きらいなもの」だった。

まわりをきよるきよる見まわしていると、それとなくこちらをうかがっている裕美と目が合った。健をななめに見る視線は、「なにやってんだか」と、小ばかにしている。

そう感じたとたん、健はあとさきも考えず、六年生の席へ突進していった。裕美の腕をわしづかみにすると、引きずるようにしてかけだした。

「なによっ！ やめてよ！」

裕美はさげびながら、それでも、健に引きずられてしかたなく走った。

ゴールにかけこんだとたん、待ちかまえていた二組の先生がマイクをつきだした。健ははげしく肩を上下させながら、「瞬おいてから、一気にさげんだ。」

「きらいなもの。ねえちゃんです。」

裕美は一瞬、目を見ひらいた。みけんにみるみる深いしわが寄った。

次の瞬間、裕美は声にならない声をあげて、体当たりするように、力いっぱい健の顔をなぐりつけた。健はもんどりうってひっくりかえり、後頭部をいやというほど地面に打ちつけた。

目の前の景色から色が消えた。痛いというより気持ちが悪くて、しばらく、ぼうつとおおむけになっていた。

気がつくとき、ゴールのそばにいた生徒たちが、口ぐちにないないながら健を取りかこんでいる。健は照れかくしにあいまいな笑顔をつくり、ひじを支えに、無理にも体をおこそうとした。

「へへ、平気、平気。だい……じょうぶ……です。」

「どけ、どけ。どきなさい！」

生徒たちをかきわけてやってきたのは、学生時代にラグビーの選手だったという男の先生だ。さつとひざまずくと、健を軽がるとだきあげた。保健室のベッドは、やたらとかたかった。両方の鼻の穴にコットンをつつこまれたので、口で息をするしかない。息苦しいうえに、のどのおくには血の味がへばりついている。

ドアの開く音がして、保健の先生が、連れてきた裕美の背中をそつとおした。

「おうちに電話を入れてくるからね。」

校庭ではなにごともしなかつたように、運動会が続いている。アップテンポの音楽やアナウンスがにぎやかにきこえている。なのに、保健室は、そこだけ四角く切りとられた別世界のように、とても静かに感じられた。

健を見おろしていた。でも、なにをいいたいのか、その目からは読みとれなかつた。

「わかつた。」

意外なことに、裕美は小さな声で、でも、ていねいに答えた。それから、ゆつくりとつけくわえた。

「とうさんの足のかわりに健が死ねばよかつたなんて、思ったことないよ。ぜつたい、ないよ。」

「こんどは健が小さな声で、ゆつくりと答えた。」

「わかつてる。」

保健室にかけつけてきた、とうさんとかあさんは、顔面そう白だった。帰りの車の中は、ちんもくがずつしりと肩に重たかつた。

夕方になって、まだ血がくつついてくるかどうか調べていると、ドアにえんりよがちなノックの音がひびいた。あわてて、血のにじんだティッシュをふとんの下におしこんだ。

「はいっ？」

裕美だった。そつとドアをおしあげたものの、ろうかに立つたまままだ。

「入ってもいい？」

(「こんなに礼儀正しいねえちゃんなんて、気持ち悪い。」)

「どうぞ。」

思わず健も、礼儀正しく答えた。

「あのさー、健に返すものがある。返したほうがいい、と思う。」

健は、少しねむつたらしい。

ふと目を開けてみると、ベッドのわきの丸いすに、裕美がうつむいてすわっていた。

健は急いで、また目をとじた。

とじたまま、「ねえちゃん……」と、よんでみた。目を合わせたら、なんにもいえない気がしたからだ。

(7)「おこつてないから。」

強がりでも負けおしみでもない。不思議なことに、いかりは少しも感じなかつた。

はげしく鼻をすする音がした。健は、裕美がよく泣くことに、あらためて気がついた。

(「気が強いくせに泣き虫じゃん。もしかしたら、ほんとうはけつこう弱虫なのかも。」)

そう思つたら、素直にことばが出てきた。

「あのさ……。ぼく、やつとわかつたんだ。とうさんの足のことだよ。ぼくがなんにも覚えてなかつたから、ねえちゃんはずるいと思つて、ずつとずつとぼくを責めてたんだ。うらんでたんだ。ね、そうでしょう？でも、思い出したから。みんな、はつきり思い出したから。だから、もういいでしょ。それに、ねえちゃんが思つてるほど、とうさん、足のこゝと気にしてないんだよ。だからさ……。」

目を開くと、いつの間にか裕美は立ち上がり、しんけんまなざしで

裕美はようやく、部屋に入ってきた。いつものがさつな動作に比べたら、まるで幽霊のように、音もなく歩いてきた。

健はベッドの上に取りあがつて、かたくなつて待っていた。

「これ……。」

裕美はふとんの上に、新聞紙にくるんだ小さな包みをそつとのせた。新聞紙は見るからに古そうで、しわがいっぱいよつている。

(「えっ、なに?」)

C 見上げると、裕美の目は、開けてみるように、といっている。

健はおそろおそろ、包みをほどいてみた。

(「うそっ!」)

ぎょうてんした。

あのスニーカーの片方だった。右足のだ。

健は、とつぜんのことに、すつかり混乱してしまった。

(「ええっ? 海に落としたのは、どっちの足のだった?」)

思い出せなかつた。

考えたこともなかつた。

裕美はベッドのわきにつつ立つたまま、元氣のない声で、ぼそぼそと話しはじめた。

「あのときね……。健は船の上ですぐに息をふきかえしたけど、またのびちゃつたし。おとうさんは血だらけだし。みんなパニックだった。わたしなんか、ずつと泣きっぱなしだった。ようやく港に着いて船を下

りるとき、気がついたら、これ、目の前に落ちてたの。おおせい人が集まってきて、口ぐちににかきけんたり、おとうさんと健を運びだしたり、大さわぎしてるのに……。これ、船の底に、なんかすく静かに、ころんところがつてた。もちろん、健が海に落ちたのじゃないよ。反対の足のだよ。だれもスニーカーのかたつぽなんて、気にもしなかったから、わたし、ひろってナップザックに入れといたんだ。そのまんま、だれにも話すこともわたすこともできなくなっちゃって……。」

予想外の展開だった。落としたくつのは夢にまで見ても、もう片方のくつの存在なんて、健には考えもおよばなかった。

(ねえちゃんがこれをひろっていたなんて……。だれにも相談もできず、いまのいままで、ひっそり、かかえこんでいたなんて……。)

ショックだった。

みるみる胸がいっぱいになり、のどがぎゅうつとすっぱくちぢんで、ひりひりした。

「知らなかった……。」

それ以上はことばにならなかった。健は新聞紙ごとスニーカーを胸にだいて、ベッドにつつぶした。

「健、ごめんね。あのう、うまくいえないけどさ。わたし、いままで(8)あいうふうにはできなかった。だって、わたし、見ちゃったんだもん。血だらけの、おとうさんの足、見ちゃったんだもん。目に焼きついて、忘れられないよ。なのに、健たら、なんにも覚えてないんだもん。つい

つい健に当たったり、心の中で責めちゃうの。そんな自分がいやでたまらなかったけど、どうしようもなかったんだ。でも、なんか……やっ少し、気持ち楽になった。スニーカーも返したし。これからはきつと、健にもやさしくできると思うからさ。」

健は泣き顔のまま、がばつとはねおきた。

「えっ、興味悪いんだけど。やさしいねえちゃんなんて、知らないしさ。」

「ま、気持ち的に、つてことだから。心配することないよ。」

裕美ははじめてほほえんで、少しだけ足音をたてて出ていった。健は裕美から受けとつた右足のスニーカーを、あれからずっと、クロゼットのおくにかくしてある。長い間、裕美が苦しみの種のようにして、ひとり、かかえてきたのだ。

(いまさらぼくが、とうさんやかあさんに見せられるはずがない。)

夢の中では、スニーカーはひろえなかった。しかし、思いがけず現実の世界で取りもどした。じっさい、手にしてみると、なくした片方より残っていた片方のほうが、ずっとずっと重かったのがわかる。

(でも、その重みから、ねえちゃんは解放された。これからは、ぼくが(9)かわつてやる……。)

(10) 健の心には、かすかなほこらしさが残った。

(今井 恭子 『ぼくのプールサイド』)

問一 線(1)「みようにとがった感じのする青白い顔」とありますが、それはだれのどのような表情ですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア 裕美と母親の間に親子げんかが始まるのではないかと不安に思う父親の表情。

イ 姉が自分につらくあたつてきそうな予感がして、あせつている健の表情。

ウ 裕美の自分勝手な行動に対して、あきれかえつている父親と母親の表情。

エ 運動会の日がせまつてきているので、いらだつている裕美の表情。

オ 裕美がなかなかテーブルにつかないので、不愉快に思う母の表情。

問二 線(2)「もしそうだったら、わたし、今年の運動会はさぼるか」とありますが、これについて次のそれぞれの問いに答えなさい。

① 「そう」とありますが、それはどのようなことですか。簡単に答えなさい。

② どうして「さぼる」つもりなのですか。次の文の

にあてはまる言葉を本文中からぬき出して、Xは一文字、Yは二文字、Zは六文字で答えなさい。

父親は X が悪いにもかかわらず保護者競技に参加をして、みんなの Y をとろうとするので、それを裕美は Z ことだと思つているから。

問三 本文中の A C にあてはまる言葉として最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二回使つてはいけません。

ア くねくね イ すらすら ウ おずおず
エ おろおろ オ ふわふわ カ しぶしぶ

問四 — 線(3)「にをそそぐ」とありますが、の中にそれぞれ漢字一文字ずつを入れなさい。

問五 — 線(a)「ひときわ」・(b)「がさつな」の意味として最も適当なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

(a)「ひときわ」

ア いちだんと

イ いっしゅん

ウ とつぜん

エ しだいに

オ みように

(b)「がさつな」

ア だいたんな

イ 生き生きした

ウ てきばきした

エ いばりちらしたような

オ 物事を雑にあつかうような

問七 — 線(5)「健の心臓が音をたててちぢんだ」とありますが、それはどうしてですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア 保護者競技に参加するよりもコンサートの手伝いをする方がはるかに父親の足にとって負担になると思ひ、心配でしかたがないから。

イ 子どもたちのことを考え、うそまでついて運動会に行かないようにしてくれた両親の気持ちに気づき、このうえなくうれしかったから。

ウ 父親が保護者競技に参加しないとわかったので、裕美のきげんが直り、運動会をさぼることもしないだろうと内心ほっとしているから。

エ 父親が運動会を欠席してコンサートの手伝いを優先させたことを知って、父親も健の存在を否定しているのだとわかり、つらくなったから。

オ 家庭内でもめごとが起こったせいで、本当は運動会に出たいはずの父親が理由をつけて欠席しなければならないことに対して、心をいためているから。

問六 — 線(4)「その姿を見ているうちに、日ごろのうっぶんが一気に爆発した」とありますが、それはどのような様子ですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア 父親の足を悪くしたのは弟のせいだとうらみ、健のことを否定しがちな裕美に対していらだちがおさえきれなくなった様子。

イ 家族の気持ちも考えず、大好きな父親に逆らうことばかりを言う裕美に対して悲しみをこらえることができなくなった様子。

ウ いつも弟に対して強く出てくるくせに、父親に強く言われたとたん泣きだして弱いふりをする裕美に対してあきれいている様子。

エ 父親と子どもたちの間にはさまれて、いつも苦しい立場に立たされている母親に対して気の毒で仕方がないと思つている様子。

オ 子どもたちの言い分を聞こうともせず、自分がやりたいことを押し通そうとしてばかりいる父親に対して強く反発している様子。

問八 — 線(6)「みけんにみるみる深いしわが寄った」とありますが、それはどのような様子を表していますか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア とんでもない回答をした健の姿を見たので、はずかしく思つている両親の様子。

イ 児童がマイクを通して非常識なことを言ったので、あきれている先生の様子。

ウ 大勢の人の前で弟にはずかしいことを言われて、いかつていゝる裕美の様子。

エ とつきにおもしろい答えを言った健を見て、笑っている観客の様子。

オ かわしい表情で近づいてくる裕美を見て、後かいている健の様子。

問九 — 線(7)「おこつてないから」とありますが、それはだれが何に對して「おこつてない」と言っているのですか。簡単に答えなさい。

問十 — 線(8)「ああいうふうにはかできなかった」とありますが、それはどのようなことですか。「〜こと」につながるように二十文字程度で答えなさい。

——線(9)「その重み」とありますが、それはどのようなことですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア 健が海に落ちたり父親がけがをしていたのに、自分は船の上で泣くことしかできず、何もしてあげられなかったことを後かいしているうえ、その気持ちを素直に表現できない自分を腹立たしく思っていたこと。

イ みんなが父親や健のことばかりを気にしていて、泣いている自分をかまってくれなかったことや、いつも家族の中で悪者あつかいされてきたことに対していらだたしく思ってきたこと。

ウ 家族のだれもが父親がけがをした日のことを忘れていないはずなのに、そのことをさけて通ってばかりで無理に明るくふるまおうとしている姿を見るのがたまらなく不愉快だったこと。

エ 父親のきげんをとってばかりいる弟や母親の姿が不愉快なだけでなく、つらくあたってばかりのいやな姉だと思っているであろう弟と毎日接することが苦痛でしかたがなかったこと。

オ 父親のけがの原因を作ったにもかかわらず、そのことを覚えていない弟に対して冷たくあたることしかできなかった自分を責め、その苦しみを一人で心の中にかかえていたこと。

——線(10)「健の心には、かすかなほこらしさが残った」とありますが、それはどうしてですか。わかりやすく説明しなさい。

以下余白

受験番号

氏名

日天三中

平成25年度 国語解答用紙

※15	※14	※13	※12	※11	※10	※9	※8	※7	※6	※5	※4	※3	※2	※1
-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

〔三〕						〔二〕					〔一〕								
問 十	問 九	問 八	問 七	問 六	問 五	問 十	問 九	問 八	問 七	問 六	6	1							
こと 問 十	問 九 (a) (b)	問 八 (a)	② X	問 六 A B C	問 五 ①	問 十 X Y Z	問 九 A B C	問 八 Y	問 七 A B C	問 六 (a) (b)	6 7 8 9 10	1 2 3 4 5							
			に										問 二	問 一	問 十	問 九	問 八	問 七	問 六
			をそそぐ										①	問 二	問 十	問 九	問 八	問 七	問 六
			問 五										問 二	問 一	問 十	問 九	問 八	問 七	問 六
			(a)										問 二	問 一	問 十	問 九	問 八	問 七	問 六
			(b)										問 二	問 一	問 十	問 九	問 八	問 七	問 六
			問 六										問 二	問 一	問 十	問 九	問 八	問 七	問 六
			問 七										問 二	問 一	問 十	問 九	問 八	問 七	問 六
			問 八										問 二	問 一	問 十	問 九	問 八	問 七	問 六
			問 九										問 二	問 一	問 十	問 九	問 八	問 七	問 六

※欄は何も書かないこと

得点	※
----	---